ネパール（カトマンズ・ヴァレー）での国際協力実習（2020 年 2 月 5 日－12 日）

グローバル社会コース（国際交流学科）の特別プログラム INSPIRE の一環授業 “Project Planning for International Cooperation” の履修学生 8 名が、ネパール（カトマンズ・ヴァレー）での国外実習に参加しました。

これは、今年初めて実行された新規研修で、参加者が計画段階から積極的に関与し、事前学習をしながら企画を作り上げていく訓練と企画実現の場であり、トリブヴァン大学工学部建築学科の教授と学生 6 名との共同フィールドワークを現地で実現するものでした。使用共通言語は英語です。

カトマンズ・ヴァレーは、レンガと木材を組み合わせた比類のない伝統建築や年中おこなわれる祭などの豊かな有形・無形の文化に満ち溢れています。事前には ITC を使った遠隔交流に留まっていたネパールの学生チームと本学学生とはすぐに打ち解け、ある日にはヒンズー教、ネワール族の仏教、チベット仏教の信仰・思想・儀礼の表象が混交するカトマンズの裏道や公共空間を 10 キロ以上も共に歩き続け、ある日にはカトマンズ市が構想中のヘリテージ・トレイル開発事業における草の根の意識調査を、二箇所の重点的貧困区域（活性化想定区域）でのインフォーマル・インタビューの形で行ないました。カトマンズの市民生活の奥地まで触れることにより、参加者はその現状を鮮烈に五感で感じる学びを得ました。そして、ネパール固有の、またネパールに限らず国際的に普遍性を持つ都市問題、開発課題、環境課題、災害復興、持続可能な観光、地域活性について、ガバナンスやコミュニケーションのあり方を中心に、夜の時間を活用し活発にディスカッションを交わすことにより、考察の深まりを実感しました。

1 週間の間には、大学間の連携と交流だけでなく、他にもあらゆる組織の方々と接し、視点を多様化、相対化することを目指しました。ネパール政府（文化・観光・民間航空省内考古局）の専門官からは、複数の文化遺産の現場で、世界遺産マネージメントのあり方や意匠の詳細、ヒンズー教の死生観等について説明を受け、多くの質問にも丁寧に答えていただきました。現地で日本語学校を経営し日本との交流に尽力してきた通訳ガイドと共に都市部を出て遠出をし、農村部におけるネパールの総体的な現状をうかがい知る機会もありました。国連教育科学文化機関（UNESCO）のネパール・カントリーオフィスへの訪問では、所長からはネパールの教育開発やジェンダー意識に関するアドヴォカシー活動について、また現地の国連機関同士の連携に関する概要説明を、また文化担当官からは主として 2015 年のネパール大地震後の文化財の修復・再建課題の説明を受けました。多くの現場を見学した後の説明だったため、参加者は技術的説明にも耳を傾け理解することができました。

さらには、在ネパール日本国大使館のご協力のもと、現特命全権大使である西郷大使からネパールと日本との外交前線のお話をうかがい、意見交換をさせていただく機会も得ました。この場は、日本とネパールの二国間関係の歴史や人の動きを中心とした現状、周辺諸国との地政学、ネパールの開発政策への日本の協力課題について、日本を軸とした視点をもってそれまでの学びを深める貴重な機会となりました。

有効に根付く国際協力には、相互の国固有の歴史文化への理解・敬意と人同士の信頼関係構築が欠かせません。その現実を実感しつつ、今後の国際的課題解決や自らの生き方に関するヒントを得て、参加者は帰国しました。

授業担当・引率教員 岡橋純子（国際交流学科准教授）